総合教育研究センター
学生向け情報誌
クレードル

CRADLE

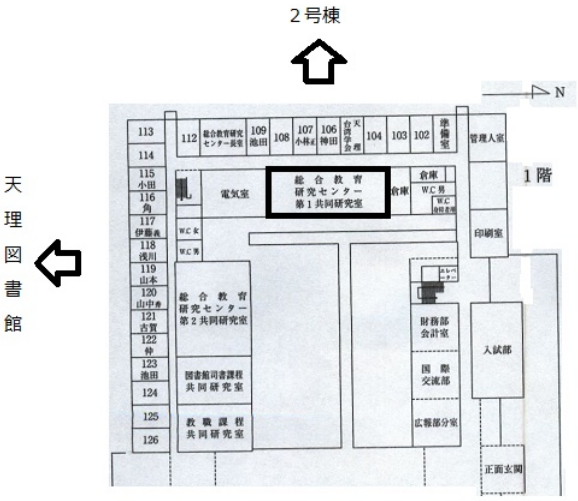
Center for Research And Development of Liberal arts Education
2nd issue

G Square（ジー スクエア）にいらっしゃい

突然の休講で行く場所がない？
お弁当をどこで食べようか迷ってる？
とにかく眠い？
そんなあなた、そして勉強したいって言う人にも
Good News!
・・・・・研究棟１階に G Square がありますよ。

G Square って何？　何をするところ？

別に何をするところとは決まっていません。
好きなことをして過ごしてください。
おやつを食べる人もいます。
おしゃべりしている人もいます。
授業の予習復習をする人やパソコンでネットしている人もいます。
ソファーで昼寝をしている人もいます。
つまり好きなときに好きなことをすればＯＫ。
あなたの、大学での居場所にしてください。
そうそう、最近レッグマジックが入りました。
痩せたい人もどうぞ。



研究棟　西側　平面図

G Square ってどこ？

左の図の太い枠のところです。
研究棟の一階、２号棟側の
ドアを入ったら、すぐ！
のれんがかかっています。

いつ開いてるの？

原則として平日の９時～４時半です。
その間は自由に出入りしてください。

第２号の内容

p.1　G Square にいらっしゃい
p.2　史上最多の参加で
　　「森に生きる」大盛況
p.7　第１回コラボ授業報告

史上最多の参加で「森に生きる」大盛況

写真は特別参加のブラッド・デイさん

日程　8 月 6 日(月)～8 月 10 日(金)　（4 泊 5 日）
場所　天理大学実習林「用木の森」（奈良県吉野郡川上村）
履修登録学生
　山城雅人（国際学部外国語学科英米語専攻１年次生）
　初田有香☆（人間学部人間関係学科臨床心理専攻２年次生）
　糸島竜也／長澤正（人間学部人間関係学科社会福祉専攻２年次生）
　井上正喜**／森穂乃香☆（国際学部地域文化学科アジア・オセアニア研究コース２年次生）
　栗山勇作***／玉正啓記***／新志孝文（文学部歴史文化学科考古学・民俗学専攻３年次生）
　井岡香奈／武政花織／福島善子（国際学部外国語学科英米語専攻３年次生）
　福本誉起（国際学部地域文化学科アメリカス研究コース３年次生）
　淺井裕登（文学部歴史文化学科考古学・民俗学専攻４年次生）
オープン参加学生
　岡本匡由****（人間学部人間関係学科生涯教育専攻４年次生)
　藤田桜**（国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科４年次生）
卒業生
　篠原聡*******（文学部歴史文化学科歴史学専攻卒業生）
特別参加
　David Gilmour　（オーストラリア・クイーンズランド州　森林保安員）
　Brad Day　（オーストラリア・クイーンズランド州　森林保安員）
　小林桐美　（アーティスト）

注　*はリピーター（*の数が参加回数）　☆は 2011 年度「森に生きる（オーストラリア版)」参加者

実習日程

8 月 6 日(月)	朝 大学出発　昼 「森」見学　宿舎到着・風呂や夕食準備・薪割り 夜 川上村役場職員による研修
8 月 7 日(火)	朝 谷林業職員によるデモ 昼 間伐作業 夜 薪割り・風呂や夕食準備　David さんと Brad さん合流
8 月 8 日(水)	朝 間伐作業　昼 間伐材による遊歩道作り作業　夜 星空観察
8 月 9 日(木)	朝 間伐作業　昼 遊歩道作り作業　夜 BBQ　星空観察
8 月 10 日(金)	朝 宿舎片付け・清掃　昼 「森と水の源流館」見学　大学到着・解散

山に入る(日常を離れて)

山城雅人「何も知らず友人もいない中での初日だったので戸惑う事ばかりでしたが、先生及び学生の皆さんの気配りや動きのお陰で無事終えられて良かったです。林業について、ほとんど知らない所から、少しでも知識が増やせて、自分は今後どう関わっていくかを考えられる良い機会も頂けました。」
糸島竜也「普段、山に行く事が無いので、とても楽しみにしていました。そして当日実習に行くと、本当に山でした。少しぐらいの山なのかと思っていましたが、本当に山の中で、建物もほとんど無く、こんなところに人が住んでいるのかと思うと本当に凄いと思いました。」
福島善子「宿舎では、思っていた以上に自然の中での暮らしで、少しビックリしましたが、どれも今しかできない貴重な経験であると共に、他の参加者の皆さんとの共同生活への楽しみが生まれてきました。(次の日)お昼に行った川も、夜に見上げた星空もどれも普段見たことがなければ、感じたことのない程美しい眺めでした。」

初田有香「川に入るのは本当に久しぶりでした。とても楽しかったです。川はとても冷たくてきれいでした。」
武政花織「今日は初めて間伐作業と遊歩道作りさせていただきました。はじめ、こんなけわしいところでやると思ってなかったのでビックリしましたが、みんながつくってくれた遊歩道があり、足場のしっかりした所もあってこういうのも人工で作られているのかと知りおどろきました。

森の作業（基本は木を切ること）

初田有香「はじめて作業を行いました。道とかが険しくて登るのがしんどかったけれど、意外と登れて良かったです。木を切るのは難しく、なかなか切れませんでした。もっとうまくのこぎりを使うことができたらいいなって思いました。」
森穂乃香「縄を木にかけ引っ張って上の方まで上げる作業は力はいらなくてもコツを掴むのが大変でした。木を切り倒すのも、ノコギリは力がいるし、斧も振り下ろす角度が難しく、自分の体力の無さにも気づきました。一番大変だったのは、どの木を倒すべきなのか、どの方向に倒すべきなのか、を見極めることでした。」
小林桐美「ロープ、斧、鋸だけで計画よく木を切ってゆく技術的な作業は魅力的でした。ロープをスイスイ木に上らせていくのは感動しました。そして、それを学生たちが素早く身につけたことには、とっても感心しました。」

森の作業（みんな大好き、遊歩道作り）

藤田桜「（３日目の）午後は念願の遊歩道作りでした。私の一番楽しみなことだったので終始わくわくしていました。道の補修を精一杯がんばりました。」
福本誉起「この２日間の遊歩道作りはトータル４時間くらいで木を切りながらも、１００メートルくらい完成した。正直、間伐作業よりも大変だったが、間伐作業よりも自分たちで協力して行ったというあかしが残ったと思う。来年の受講生のためにも、より歩きやすい森になっていけばなぁと思った。」
福島善子「昨日でだいたいの形が決まっていたのでそれを実際に木であてはめていき、思い描いた通りの道ができていきました。最後は一緒に作業をしていたみんなで、他のチームが作った道を見回りました。みんなそれぞれにアイディアも、方法も違っていて、山が初めて登ったときよりも明るくて、にぎやかな雰囲気になっていました♪」

異文化交流（できたかな?）

栗山勇作「今日は５日間の中で一番ディビッドとブラッドと話すことが出来た。英語はあまり話せなかったが雰囲気と身ぶり手ぶりである程度意思の疎通が出来ることが体で分かった。」
浅井裕登「ディビッドとブラッドは凄い。本場の保安員だ。道具がないならばあるもので道具を作るのだ。ディビッドとブラッドが言っていた。プロだ。」
篠原聡「ディビッドとブラッドの経験や知識を使わせてもらおうと丸投げ状態にしてみた。すると想像以上に、その技術や考え方に驚かされた。やっぱり仕事柄木の取り扱い方が上手い。」
藤田桜「英語ができないのと、シャイなことに猛烈にふがいなさを感じています。頑張れ自分。」
武政花織「私は太田先生とディビッドさんとブラッドさんと４人で吉野に来ました。車の中はほとんど英語だったので、私にとってすごく良い環境だったと思いました。でも言っていることはなんとなく分かっても、自分からしゃべったり質問したりできなくて、もっと speaking の力がほしかったです」

共同生活は協力が大事

新志孝文「５時半に起床し６時から本格的に朝食と昼食の準備。僕はとにかく火の番をしていた。朝食を食べ終わった後、昼の弁当を準備した。」
玉正啓記「前日のミーティングが生きたのか朝食までスムーズにつながる。お味噌汁の代わりに作ったおすいものがとてもおいしかった。」
糸島竜也「釜を使う事や、薪割り、そして神様や色んな人への感謝、普段では出来ない経験、忘れがちな事を、この期間に沢山経験しました。なによりも、自分で一生懸命に焚いた風呂は本当に格別でした。」
淺井裕登「流しそうめんがとても上手くいった。片付けが早い。素晴らしい。」

長澤正「同じ大学なのに喋った事も会った事も無い人達と仲良くなって、初めてだらけの事を５日間協力しながら乗り越え、その仲良くなった人たちと流しそうめんやバーベキューもできて、普段は見る事の無い天体観測も出来て、森に生きるに来て本当に良かったと思いました。」
藤田桜「お鍋とお釜を池田先生とめちゃめちゃ洗ったら指の肉がまっくろ！！お風呂に入っても取れませんでした。えーん。とうびちゃんとアリスの話をしながらお風呂を頂きました。」
小林桐美「キャンプはしたことありますが、民家での宿泊は初めて。ふとんを運ぶなんてさすが日本！」

最終日に思う

井岡香奈「人生初の竹を使った本物の流しそうめん！（＾＾）片付けをしていると、楽しかったこの生活が終わってしまうんだと感じました。」
初田有香「ついに、森に生きるが終わって悲しいです。この生活を通して、いろいろ反省することもありました。でもとっても楽しかったです。今までにこのような活動をしたことがなかったので良かったです。」
福本誉起「掃除はまず、お風呂場の掃除を担当した。４日間お世話になったお風呂に愛情を込めてしっかりと磨いた。男子の部屋のチリ、ホコリもすごかった。宿舎とはここでお別れ、最後に用木の森のプレートの前で、集合写真を撮った。そこには過去８年間の実習生の名前が書かれてあった。今後も一生記念として残してほしいと思った。」
新志孝文「この５日間で学んだことはたくさんあります。それを普段の生活に生かせる部分は生かしていきたいと思います。とても充実した５日間でした。みんなと楽しく協力して過ごすことができました。なんだか少し淋しい気持ちもあります。」
井上正喜「今まで先生や先輩方が頑張ってきてくださったお陰で、来年「森に生きる」が 10 回目という節目になります。全員で連携をとって来年の「森に生きる」を過去最高のものにしたいと思います。」

「森に生きる」参加記 2012

仲淳（人間学部総合教育研究センター教職課程）

今年も「森に生きる」に参加させていただいた。今年度は学生の参加人数が過去最大の数となり、また地元の林業に携わる方々との交流もあって、いろいろなことを考えさせられた「森に生きる」であった。

地元の林業家の方たちの話によると、吉野の伝統的な林業は後継者不足などで非常に深刻な状況にあり、ほとんどの森は間伐をされないままに放置されて、とてもよくない状態にあるということであった。

かつて吉野の森では、親が子の頭を撫でて育てるように、撫育と呼ばれるやり方で一本一本の木が手塩にかけて大切に育てられていたのだという。しかし今はそういうやり方はあまり流行らない。なにごとも、なるべくスピーディーに、より安く、が原則となっていて、国内の高い木材よりも、海外の安い合板材の方が流行るのだという。たとえ手塩にかけて木を育てて切り出しても、運搬費用などの方が高くついて、商売にならないということなのであった。

本来木を育てるのには時間がかかる。100 年 200 年先を見越した地道な営みが必要なのだ。しかし、繰り返しになるが、最近はそういうスタイルはあまり流行らないのだ。

ある年配の林業家の方が、樹齢 200 年、250 年を超すような大木を切るとなると、一週間眠れないし、ものすごく神妙な、なんとも言い表しがたい気持ちになるのです、とおっしゃられていた。そのような木を切り倒すときには、ひたすら木と対話して、どちらへどのように倒れたがっているのかなど、そういうことを木の肌に触れ、周囲の山々を歩きまわって、無言の森にどうすればよいのかを聴かれるのだということであった。

その方は、「大切なのは何度も何度も自分の足で森を歩きまわって、森を知ることなのです」と語られた。木や森、山といういのちに対する畏敬の念を持ちながら仕事をされているそのあり方に、筆者は深く感銘を覚えたのである。しかし、そのような仕事のやり方は、もはや続けていけないのが現状であるということも聴き、複雑な気持ちになった。

森に生きること、森と生きること。それは奥の深い、むずかしいことなのだろうと思う。かつてはおそらく、木材を神さまからのいただきものとして大切に頂いて家を建てて住まわせてもらう。そういう感覚が私たちには残っていたのではないかと思う。しかし、鉄筋コンクリートのビルディングに囲まれて都会のマンション住まいをしていれば、そのような感覚は育ちようもない。森の荒廃とともに、私たちの心もいつしか荒廃を始めていて、地滑りを起こしてしまわないだろうか？とあらぬことまで考えてしまうわけなのであるが、考え過ぎだろうか？

人は地面を離れては生きることができない。しかし私たちの日々の生活は、ものすごく土を離れた生活になってしまっている。そこに、無理はないのであろうか？自然本来のゆっくりとしたスピードを忘れて、人間がきちんと育っていくことができるのだろうか？

今年はそんないろいろなことをあらためて考えさせられた「森に生きる」であった。しかし、こういうことを 4 回目の参加にして初めて考えさせてもらえたことが、「森に生きる」の授業の成果なのかもしれない。また来年も学生さんたちとともに、森に入らせていただいて、いろいろなことを考えてゆきたい。

「現代人にとって宗教とは？」について語る
―第１回コラボ授業のレポート―

山本和行(人間学部総合教育研究センター教職課程)

「これから夏本番！」と朝から天気予報で言っていたとおりの茹だるような暑さのさなか、7 月 25 日に 22B 教室で「コラボ授業」という新しい授業の試みがなされました。

この授業は人間学部の先生を中心に、新しい授業の形を模索する動きの一環として考えられたものです。今回ははじめての試みということで、宗教学科の島田勝巳先生が担当されている「人間論３」の授業の最終回をお借りして、ひとつのテーマをめぐって、複数教員による「コラボレーション（collaboration）」を通じて議論し、深めていこうという企画になりました。

今回のテーマは、タイトルに書いた「現代人にとって宗教とは？」です。これは、非常に壮大かつ高尚なテーマであるように思いますが、天理大学に通うみなさんにとっては、宗教は自分が信仰を持っているかどうかにかかわらず、日々いろんな形で目にする身近なものでもあるはずです。そうした難しくもあり近しくもあるようなテーマについて、普段みなさんと接している先生たちはどのように議論するのか。これがこの授業の大きな見どころのひとつでした。指定討論者として、島田先生をはじめ、生涯教育専攻の石飛和彦先生、総合教育研究センター教職課程の池田華子先生にご登壇いただき、そのほかフロアに受講生とともに 10 名弱の教員も座っているという形でおこなわれました。

授業にあたっては、事前に「人間論３」の受講生に「あなたにとって宗教のイメージとは？」という問いで、短文のコメントを書いてもらいました。議論は、島田先生による授業の総括後、そのアンケートについて考えていくという形ではじまりました。

大きな論点として、「信じるとはどういうことか？」という問いが挙げられ、池田先生が受講生のコメントから「自力で頑張れるところまでは自力で頑張り、どうしようもなくなったら神様に甘えればいい」という記述を取り上げ、「神様に甘えること」と「信じること」との関係、「信仰」と「戒律」との関係について問題提起をしました。

この問題提起をきっかけに、「宗教」「信仰」をめぐる多様な視点が提出されました。日常的・習慣的な宗教的行為（初詣、占い、冠婚葬祭など）と「信仰」との違いについての質問が挙がるなか、島田先生からは「文化的な信仰」と「自覚的な信仰」、日本の宗教に見られる「人間関係の宗教」という側面に注目するという視点が示されます。これに対して、石飛先生からは人々が「スピリチュアリティ」などに惹かれることは「宗教的」だと言えるのか、「文化的な信仰」のなかに見出せる宗教性とはどのようなものか、といった疑問が提示されました。

その後、宗教における「世俗化」、「共同性」、「つながり」といったことをキーワードに、「信じる」という行為の意味、その延長線上にイメージされる「宗教」のありかたについて、夏の暑さに負けない「熱い」議論が最後まで展開されました。テーマだけが設定された自由討論という形を採ったため、議論が展開されていくスピードの速さや、単純な「落としどころ」にまとまらないような議論の複雑さにとまどうような雰囲気もありました。それでも、登壇した先生たちが緊張しながらも議論を展開する様子は、「コラボレーション」によって生まれる化学反応を惹き起こし、受講生のみなさんもそれをそれぞれに感じてくれていたようでした。

授業後に集められた受講生のコメントには、「難しかった」、「もっと学生にも話をさせてほしかった」といった意見がありましたが、それ以上に、「宗教とは何か？」「信じるとはどういうことか？」という本授業のテーマについて、自分自身のこれまでの考え方から、もう一段深く考えてみようとするコメントが多数見られました。天理教を信仰している人にとっては自らの信仰をどう考えるか、天理教を信仰していない人にとっては自分の周囲にある信仰のありかたをどう考えるか、自分たちの生活と決して無縁ではな

いものとして、「宗教」や「信仰」を捉えようとしてくれていたと感じるコメントがたくさんありました。

「コラボ授業」の試みはまだ始まったばかりです。実際に授業をおこなってみて、先生たちにとっても、予想できなかった様々な反省点や改善点が見えてきました。授業終了後には、「秋もやりましょう」という声がどこからともなく挙がりました。今後も、今回の経験を踏まえ、機会を設けて実現していきたいと考えています。「コラボ授業は見ていて楽しかった」「考えさせられた」という受講生のコメントに、しっかりと応えられるような授業にしていきたいと思いますので、みなさんも受講する機会があれば、ぜひ先生たちの「熱い」言葉に触れて、いろんなことについて楽しく深く考えてもらえれば幸いです。次の第 2 回、第 3 回の「コラボ授業」を楽しみにしていてくださいね。

CRADLE(クレードル)　第 2 号
2012 年 11 月発行
発行者　伊藤義之
天理大学 人間学部 総合教育研究センター
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050
電話・FAX　0743-63-7092 (内線)6111